
不器用な恋愛

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用な恋愛

【Nコード】

N6824G

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

冬獅郎×夏梨です。…あんま上手くないかもしれませんが、どうぞご覧になって下さい♪（＾＾＊

「そうそう。そういえば…」

「そうそう。そういえば」

足元にあったサッカーボールを器用に足で宙に上げ、片手でキャッチする。

「日番谷隊長が、告白…されたらしいぜ」

「はあっ!？」

日番谷の外見と、その真面目さ。そしてあの冷静沈着さなどを考えれば告白されるのなんて予想できて当然だが、何でまたそんな噂が流れているのか。日番谷に告白したい者などこの世に無限にいないって過言ではない。

「誰にだよ？」

「ん？人間」

「人間？死神じゃねえのか？」

死神が見える人間なんて、そういない。見つけるのは容易いだろう。…見つけたい訳ではないけれど。どこか、嫌な予感がする。そう思っ
て、隣にいる赤い髪と刺青がやけに周りから目を引く恋次に、一護は視線を向けた。

「人間だよ、人間。だからこうやって噂になってるんじゃないか」

「…相手は？分かってんのか？」

やけに一護が恋次につっかかる。恋次は少しその勢いに押されて、危うく拾い上げたサッカーボールを落としそうになった。

「黒崎」

「…は？」

ほらきた。

「黒崎、夏梨…。お前の妹だ」

嫌な予感、的中じゃねえか。一護は、恋次からサッカーボールを奪い取って、壁に思い切り蹴りつけた。跳ね返ってきたボールを、恋次は少し驚きながらキャッチする。もの凄い速さだったが、普段闘いなれている恋次にとっては朝飯前に等しかった。

「そうカリカリすんなよ。別に良いじゃねえか…」

「良いじゃねえかって…妹だぞ！心配じゃねーか！」

「そういうもんかあ？」

ジープンのポケットに手をつ突っ込んで、恋次は面倒くさそうに一護から顔を背けた。

「じゃあ…例えば、だ。ルキアが他の男に告白された、何て聞いたらどうだよ？」

「…告白した奴を締めるな、確実に。…いや殺すかも…って…いや、俺だったら何も…」

恋次は自分が言った言葉を訂正しようとしたが、一護はそれに少し笑い、恋次の言葉を止めた。

一護にとっては、お兄ちゃんとしての「嫉妬」。恋次にとっては幼馴染としての「嫉妬」なのかもしれない。

「だろ？同じ気持ちだ…。相手が冬獅郎だろうとなんだらうと関係ねえ…」

「俺が…何だって？」

不意に聞こえた、アルトの喋り声。身が凍りつく、というのはこういう事なのかもしれない。

一護の首筋に、無意識に冷や汗が流れた。

「日番谷隊長…いつから…そこに…？」

「そうだな。阿散井、てめえが『そうそう。そういえば』とか言ってた頃だったか」

「…つまり最初からかよ…」

げんなりとしたため息をついて、後ろに振り返った。そこには腕を組んで凜とした格好の、死神姿の冬獅郎が居た。

「ん？冬獅郎…なんでお前そんな格好なんだよ？」

「あ…義骸は何だか落ち着かなくてな」

「日番谷隊長」

一護と日番谷との会話の間を、割ってはいるのは恋次だ。

「返事は、どうしたんスか？」

「はあ？んな事気にしてんのか、お前…」

日番谷の呆れた返事に、恋次は少し口元に笑みを浮かべて、「そうっスよねえ？」と、喋りだす。

「日番谷隊長には愛しの雛森が居ますからねえ？」

「…」

日番谷の眉が、少し跳ね上がった。

「阿散井…てめえ、俺が今死神姿だって事…忘れてねえよな…？」

「一護、聞くんか？この間なんて日番谷隊長なあ…」

恋次の意地悪そうな、その笑みに日番谷は更に頭にきたのだった。

「…霜天に坐せ…氷輪丸…」

その普段の何倍も低い声で呼び出された氷の竜は、二人に向かってものすごい勢いで向かって行ったのだった。

「冬獅郎と、だな…」

「恋次！ てめえのせいだぞ！！」

「何でだよ！ お前が聞こうとしてた事を直接聞いてやっただけだろうが！！」

素早く義魂丸を飲み込んで死神化した二人は、空中を氷の竜から逃げ回っていた。はるか上空にまで、その竜は滝を昇るかのごとく垂直に空を駆け抜けてきた。

「大体なァ！ 言うんならオブラートに包んだりとかするだろ、普通！！」

「俺はどストレートの方が本心が伝わっていいかなどか思ってる…」

「お前のことなんて聞いてねえよ！！」

走りながら二人の死神が、どうしようもないケンカをしていると分かったら、どれだけ呆れる事か。遠くから竜を操っている日番谷は、その様子を半分呆れて、半分楽しげに見ていた。

「おい黒崎！ さっきの話だが…」

そのアルトの声は、どれだけ離れていてもしっかりと空を伝い、一護の鼓膜を揺らした。

「妹に聞いてみる」

それだけ言って、瞬歩で消えて行った。

「…妹…夏梨か…？」

普通そうだろう。夏梨が告白したのだから、夏梨に聞く意外何も無い。遊子に聞いた所で、死神が見えないのだからそもそもその意味が無いということは一護自信、分かっているはずだ。だか、混乱でその事がすぐには理解できなかった。

「おい、どーするよ。日番谷隊長行っちゃったぞ」

「…しょーがねえな…」

一護は髪を乱暴に掻くと、恋次に向き直って、「行くか」と遠めに見える自分の家に視線を伸ばした。

…そうは言ってもだ。

夏梨が家に居るはずが無い。この時間帯だと、恐らく外で元気よくサッカーをしているだろう。そうすると夏梨が居るのは家ではなく、いつもの空き地である。もしくは、学校だ。遊子が居る可能性も高い。

…いや、それ以前にだ。

一護がそんな事を聞けるのだろうか。こういう事になると一気に消極的になるのが玉にキズである。だから井上に告白できないんだ、恋次はそう思う。

「お前の妹、どこにいんだよ」

「多分…この時間だと空き地だな」

そう言って、急降下、急ブレーキをする。恋次が慌ててそれに習って止まり、一護の後ろからその様子を覗き見る。

「どうした？ 一護。妹居るじゃねーか」

「いや…そうなんだけどよ…」

もじもじというのか、うだうだというのか、はっきりしない一護に恋次は思いつき蹴り上げ、一護を無理矢理前に出させる。自分の尻をさすりながら、若干涙目で「何すんだよ!」と言ってみるが、その言い方にもはや普段の一護の面影は無い。

「早く行けよ」

と目で一護を動かし、一步前に踏み出させる。

そこで気が付いたのだが。

一護は今死神姿である。夏梨と普通に話したら回りの子供に夏梨が変な目で見られてしまう。さて、どうしたものか。

答えは一つ。

気が付くまで、ひたすら手招きだった。

気が付いたのは、意外にも早く、五分もなかった。

夏梨は周りの友達に適当に言い訳を作り、一護の元に駆け寄ってくる。不思議そうに一護を見上げる顔は、恋愛をしている子供の目ではない。純粋な子供の目である。

尚更、聞けなくなった。

だが、ここは踏み出さなくては男ではない。それに、だ。後ろから恋次の殺気のこもった視線が来るから、逃げるわけにも行かないだろう。

「どうしたの、一兄?」

「い…いやあ…その、だな…」

「何? ハッキリしないなあ…。あたし、早くサッカーしに行きたいんだけど」

——まずい。

ここを逃したらもう二度と逃げないかもしれない。
そんなことは無いのだけれど、直感的にそう思ってしまったのだ。

「冬獅郎と、だな」

その言葉を口にする、イライラした表情だった夏梨の表情が一気に明るくなるのが一目で分かった。

——まさか、な…。

そんなわけねーって。偶然偶然。

そうあることを願いながら、言葉を口にした。

「付き合ってるのか？」

「いや…その、別に…」

——なんだよ、この表情…。

今まで見たことねえぞ、夏梨のこんな表情。

こんなに目を輝かして、少し頬が赤くて、それを見られるのが嫌だから帽子を目深にかぶってる…一護が今までに一度も見たことの無い表情、だった。

「で？ どうなんだよ」

「いや…その、別に…」

急に口ごもる夏梨。一護は内心ショックを受ける。そして、ちょっとした作り笑いをしながら、夏梨の肩に手を置いた。

「お前…やったな！ とうとうお前も彼氏が出来たんだな…。妹の成長つてのは、早いもんだな」

「え、いや、だから…」

違う、とでも言いたげに顔をバツと上げた頃にはもう遅かった。一護の姿はそこにはもう無かったのだから。

「黒崎！、早く来いよー！」

「あ、おう！」

友達の元へ駆け寄って行く夏梨の背中を、一護は上空から複雑な思いで見つめていた。

——結果、どうだったんだよ？

なんて聞かなくても分かるほどの一護の落胆した様子。これはもう事実だったんだろうとしか思えない。

「あ、あのよ、一護……」

「あ——っ！！ 清々した！！」

「……は？」

いきなり叫びだした一護に少しびくっとしながら、恋次は一護に視線を向けた。

一護は胡坐をかいて、膝を揺らしている。眉間に皺が普段より寄っているのを見ると、あきらかに「清々」していないという事が丸分かりだ。

「あんな男っぽいやつでも彼氏が出来るって考えたらスッキリした！ もう『お兄ちゃん』なんて必要ねーよな」

「一護、ちよつと落ち着けよ……」

「大体、俺も心配しすぎだったんだよな！ 彼氏が冬獅郎なら問題無えじゃねーか！」

イライラした口調で淡々と吐き出すように言う一護に、恋次は全く口を挟むことが出来ず、ただただ愚痴とも取れるその叫び声をBG Mのように聞き流す事しか出来なかった。

「……はあ……」

ため息をついて、一息ついた一護を見て、恋次は声をかけようとした。

——そう。かけようとしたのだ。
しかし、聞こえてきたその声は……。

「…スッキリしたか？」

日番谷の声だった。

その声にギョツとして二人は振り返ると、一気に尻込みした。その尻込みがちよつとした尻込みではなく、かなりのものだったので、二人して壁にダンツと思いっきり背中をぶつけてしまった。それを日番谷は腕を組んで冷めた目で見ていた。

「日番谷隊長：現世に来てまでその癖、やめてほしいんすけど…」
「ああ：悪いな、うっかり」

何がうっかりだ！ 霊圧消す癖なんて、うっかり出来るもんじゃねえだろ！ 確信犯だ、確信犯！
一護はそう言いたかったが、グツと口をつぐむ。
何たって妹の彼氏だ。兄貴に悪い印象を持たれてしまっでは、夏梨の印象も悪くなってしまうのは自然の摂理だろう。

「…で？ 言いたい事はそれで全部か？」
「え？ あ、ああ…」

日番谷は一護の曖昧な返事に「ふーん」と子供のように空返事をして、懷からカセットテープらしきものを取り出した。

「じゃ、録らせてもらったからな」
「はあっ!？」

訳の分からないその日本語を理解するのに少し時間が掛かり、その叫び声が聞こえたのは日番谷の言葉が発せられた数秒経った後だった。

「待て、何で録ってんだ！」

「録り方は松本から教えてもらったから、怒るなら松本を怒れ」

「違えよ！　そう言うこと言ってんじゃないくてだなあっ！！」

叫んだ一護の声は虚しく空に響き渡り日番谷の耳に入ることとは無かった。

「…何か、嬉しそうだな。…お前」

夏梨は泥だらけの格好でサッカーボールを片手にかかえていた。ふう、と腕で額を拭い、何かにひた、と目を止めた。

「あ、冬獅郎！」

銀髪と死覇装。その組み合わせはこの街中ではとても目立つものだ。日番谷の方へ駆け寄って行く夏梨の表情は、明るかった。
…そう、まるで彼氏に駆け寄って行くかのように。

「例のアレ、持ってきたか？」

「ああ、当然だろ」

懐から先ほどのカセットテープを取り出す。夏梨はそれを受け取り、大事そうにポケットにしまった。

そのうきうきした様子を見て、ため息をついたのは日番谷。

「…何か、嬉しそうだな。…お前」

そう、日番谷が少し呆れたように言うと、夏梨は少し恥ずかしそうに帽子を少し深くかぶった。

そして、少し笑いながら、

「そうか？ でも、確かにそうかも」

と答える。

夕日で日番谷の髪は綺麗なオレンジ色になり、幻想的な色になる。二人は、並んで帰路に着いた。

「…なあ、一護？　おーい…」

恋次の声は聞こえていない。

一護は何が起こったのか全く理解できていない様子だった。
声？　録る？　彼氏？

色んな事が一気に起きて、頭が今にも割れてしまいそうだ。

一護は頭を抱える。

ぐしゃぐしゃと乱暴に髪を逆撫でて、一気に叫び出す。

「だー！　もー！　しゃーねえ！　こうなったら冬獅郎を問いただして…」

「一護」

恋次が一護の肩を人差し指でトントンと叩く。

一護は少し不機嫌に恋次の方を振り返ると、「何だよ？」とこれまた不機嫌に答える。

「ほら、下。よく見ろ」

「下？　何だよ、下って…」

一護が何気なく下を見下ろす。いつもの風景に、何故か見慣れないものがある。一護は目を凝らした。そして、その眼中に入ったのは…。

夏梨と日番谷が二人並んで帰っているところだった。

ズガンと鉄パイプで頭を叩かれたような衝撃が走った。大袈裟？

確かに大袈裟かもしれない。しかし、一護にとってはそれくらいの衝撃だったのだ。それくらい、心に響くものだったのだ。

「あー…」

まずい事をしてしまった。恋次は、そう思う。確実にしてはいけない事をしてしまったという事に、今更気付く。ただ、一護の目を覚まさせるためには丁度良い証拠だと見せ付けてやりたかったのだ。滅多に悩まない一護が、こんな事にぐちぐち悩んでいるのを見るのがもう嫌で嫌で、こういう事をしてしまったのかもしれない。

「あ、でも一護。手は繋いでねえぞ」

恋次が気休め、ということとでその言葉をかけた。

しかし、一護の姿は恋次の近くにはない。ハッとして下を向くと、予想通り。

夏梨の日番谷の元に一護が駆けつけているのが見えた。

「…一護オ…もう諦めろよ…」

がつくりとうなだれた恋次の背中には、やんわりと星がちらついていた。

もう、夜が近づいてきたのかもしれない。

「俺の大切な妹に何かあったら、絶対エ許さねえぞ」

ごそごとと、何度もカセットテープがちゃんとポケットに入っているか確認する夏梨を視界に捕らえ、日番谷は馴染みのある霊圧に身体をピクリと反応させた。

「黒崎、止まれ」

「ん？ 何だよ冬獅郎、止まれって…」

静かに、でも重々しく夏梨の前に飛び降りてきたのは、紛れもない。夏梨の兄、一護だった。

「い…一兄…」

「悪いな、夏梨…。幸せに歩いてるところを邪魔しちまって…。けど、俺はお前の彼氏さんに一つ文句があんだよ…」

え？ と夏梨は一護の言葉に疑問を覚えた。「待つてよ、一兄」その声が喉まで来てクツと引っかかったように言葉にならない。…いや、言葉にしなかったのだ。日番谷が、一護にばれないように夏梨に制止の合図を片手で出していた。それに気付いた夏梨は、反射的にその場にとどまり、サッカーボールをぎゅうつと強く腕で抱き締める。

「何だよ、黒崎？」

黒崎一護と黒崎夏梨、二人を前にして「黒崎」と口にするのはどこか違和感を覚えながらも、日番谷はその単語を口にした。

「さっきのカセットテープ…出せ」

一護は片手を日番谷の前に出し、そう要求する。怒り覚えながらも、それを必死で押さえ込んでいるのは一目瞭然だ。

「はあ？ んなもん気にしてんのか、お前？ そういうの、『しょーしんもの』って言うんだぜ」

「小心者だろーがなんだろーが、気になんだろ。何のために録ってたんだ？」

「何のためって…」

日番谷は頭の後頭部辺りを掻き、ため息をつく。少し視線を夏梨に向けて、もう一度、ため息。腕を組んで、目を閉じた。次に発した言葉は、夏梨も予想できなかった言葉。日番谷自身には何か考えあつての言葉だったのだろうが、あまりに自然すぎて、誰一人そんな事に気づきもしなかった。

「別にいいだろ、そんな事。つーか俺と夏梨の時間を邪魔すんな。さっさと帰れ、もう夜だぞ」

そう言いながらスッと一護の横を横切る。日番谷は何気なく夏梨の片手を取り、そのまま引っ張って行く。

「ちよっ…ちよっと待てよ、冬獅郎！」

「あんだよ？」

不機嫌そうに、肩越しに振り返る。それを確認して、一護は思い切ったように口を開いた。

「…夏梨は…さ、その…男っぽい奴で、不器用で…だから今まで男に告白された事もなかったし、した事もなかったんだ。…その…何

っ！か：色々大変だろうけど、頼むな」

日番谷の口角が上がった事に、一護は気が付かない。一護は、そのまま続けた。

「俺の大切な妹に何かあったら、絶対エ許さねえぞ」

その言葉に、夏梨は一護の方を振り向いた。それと同時に、日番谷は夏梨のポケットに入っていたカセットテープを抜き出した。

「一兄！」

そう言いながら夏梨は一護の方に駆け寄る。その顔は、満面の笑みでいっぱいだった。それこそ、今まで見たことの無い表情である。

「え？　ちょ、夏梨！？」

慌てふためく一護を尻目に、日番谷はカセットテープを目にした。そして、グッと握り締める。

「黒崎！、もうこんなもん、要らねえよな？」

え？　「黒崎」？　さっき「夏梨」って呼んでなかったか？　一護は混乱する。そして、日番谷の問いに対する答えを、一護は待った。

「おう！　いろいろありがとな、冬獅郎！」

「色々」？　何が？　もしかして俺、踊らされてた？　一護の中に、ふつつつと何かが込み上げてくる。本当に頭が爆発しそうだ。

「おい、兄貴の方の黒崎。まさかとは思うが、混乱してねえよな？」

こんな質問に、うんと頷けるわけがない。混乱しまくりである。むしろ、こんな状況で混乱しないわけがない。その様子を察知した日番谷は、ため息をついて、髪を前から後ろに掻き揚げる。

「……たく……妹、お前、先に帰ってろ。兄貴には俺から説明しとくから」

「りょーかい！　じゃな、冬獅郎、一兄！」

夏梨は一護から勢いよく離れると、そのままダッシュで帰路に着いたのだった。

全ての真実

「わっけ分かんねー!!」

「耳元で叫ぶな。鼓膜が裂ける」

嫌そうにそう呟くと、日番谷は再度腕を組んだ。日番谷の頭のちよつと上から、一番星が覗ける。

「今から順に説明してくから、もう騒ぐな」

「ンな事言ってもよォ!!」

「…同じ事を二度言わせるつもりか…」

キツと翡翠の目が一護を睨みつけた。それから、一護は蛇に睨まれた蛙のように、全く動かなかったし、喋りもしなかった。それを確認して、日番谷は淡々と喋り始める。

「まず、カセットテープだが」

「いや、その前に」

「あ? 何だ」

何だ、どころではない。それ以前に説明しなくてはならない事がたくさんあるだろう、と。一護はそう言いたかったのだ。しかし、日番谷はそれを察していた。

「結論とかそれ以前の過程とかの話を急ぐんじゃねえよ。先にこつちから話したほうが話がすすめやすい」

一護の心が見透かされたような瞬間だった。この瞬間、一護の内部の急せいでいた気持ちがちゅん、としぼんでいく。少しは、落ち着き

を取り戻していつているのかもしれない。我ながら、気持ちが焦りすぎだ、と一護は思う。

「アレはお前も分かってると思うが、あの怒号を録ってたもんだ。で、その理由だが」

「そう、それ！ 俺が今回一番頭来たヤツだ。勝手に人の音声録りやがって」

学ぶ事を知らねえのか、てめえは。とでも言いたげな目を向けられ、一護は何事もなかったかのように黙り込む。歩く速度も心なしか早くなり、先ほどの「落ち着き」は全く無いといってもよかった。そんな事が丸分かりな態度だ。

「お前の妹：黒崎夏梨が心配しててな」

「…心配？」

日番谷は「ああ」と頷くと、着物の裾を整える。同時に、もう既に暗くなった空を見上げた。

「黒崎。お前、このところ…家に帰って無えだろ」

「ん、ああ…」

「それが原因だ。あいつ、大分心配してたんだぜ？」

家に居ない。それはつまり、一護が「修行している」という事を日番谷はすぐに直感出来たのだろう。しかし、それを夏梨に言ったところで理解できたもんじゃない。夏梨の言う事に渋々従うしかなかったのだ。

「あいつが血相変えて俺を見つけた瞬間やって来てな。『協力してくれ』なんて言うもんだから最初は困ったんだが…」

まさか、こんな単純な事だったなんてな、とまで言って、日番谷は言葉をとめる。一護の言葉をまるで待っているかのようだ。先ほどまであんなに速かった歩調が、今では随分ゆっくりになっているのに気が付いているのは、恐らく日番谷だけだろう。

「じゃあ何か？ お前と夏梨が付き合ってたって言うデマ情報を流して、俺がそれに乗ったのを確認して、それを利用したってことか？」

「まあ、そうだな。お前があの時叫んだ言葉は全部本音だろ？ それを聞けば、黒崎が何で家に帰って来ないかが分かるかも、とか言い出してな」

「え？ 何で分かるんだよ？」

「自分のせい、だとも思ってたんだろ」

は？ という顔を一護は日番谷に向けた。日番谷は組んでいた腕を振り解いて困ったように後頭部に手をやった。

「自分の事が嫌いで、それで帰ってこないんじゃないかって思ってたんだろうな。あいつのことだし」「はあっ！？ んなわけねーだろ！ 何考えてんだ、あいつ…」

一護がそう言って、それから笑う。

「…こりゃ、帰ってやらねえとマズイかもな」

「まだまだ『お兄ちゃん』が必要だってことだな」

その言葉に、一護は「そうだな」と小さく微笑。それにつられて日番谷も少し笑う。

「あんな性格でもまだまだ幼いもんな。なあ？ 冬獅郎」

「何で俺が出て来んだよ」

外見は完全に夏梨や遊子と同じか、それよりも下でもおかしくないのに。それなのに自分よりもしっかりしていると思うと、とてもおかしい気がする。見た目は子供、頭脳は何たら、といったキャッチフレーズをつい思い出しそうになる。

「…ん？ 待て、デマ情報を流したってことは…」

嫌な予感が一護の脳内を光の速さで駆け巡る。

「もしかして…」

冷や汗がドツと出てきて、もうそこから先の言葉を口にしたくないし、信じたくも無かった。でも、真実を知る為には仕方が無い。

「恋次もグルなのか!？」

「…気付くの遅えよ…」

呆れたように、日番谷はため息と同時にその言葉を吐いた。一護の拳がプルプルと震える。

「恋次、あの野郎オオオ!!!」

その声は、暗い漆黒にただただ木霊するのであった。

全ての真実（後書き）

今週号のジャンプの日番谷は相当カッコイイですね（^^
久保さん、ナイスだと思います（*^ー^）b
最近のジャンプは良い感じに日番谷が出てきて良いですね。

橙　一オレンジー

あの騒動から、数日。

温かいオレンジが街を包む夕暮れの時、日番谷はただゆく当てもなくふらふらと街を歩いていた。

——たまには、サボるのも悪くねえ。

そんな事を思いながら、残り僅かに残された「現世」での時間を大切にしていた。久々に肩の荷が降りたからだろうか。無意識の内に、日番谷はふわりと宙に浮かぶ。純白の隊首羽織が同時に翻り、一瞬、時が止まったかのような錯覚を覚える。

何もない橙の空に、ポツンと浮かぶ、純白の羽織。それが、目立たないはずがない。夏梨は、ハッとそれを目に留めた。決して高くはない位置に居るその銀髪から、自分が持っているサッカーボールに視線を移す。にやり、と口角が上がった。フツと手からボールを落とし、ワンバウンド。それに吸い込まれるように、夏梨の右足が直撃する。狙いは完璧。威力も抜群。当たったらひとたまりもない。

「何なんだよ、てめえは」

スツと後ろを振り向かれ、片手でそのボールを止められる。アルトの声が、夏梨の鼓膜を揺さ振った。瞬きをした次の瞬間には、日番谷が自分の正面に居るのだから驚くより他はない。

「つたく…。手伝ってやった恩人に、そんな事するか、普通？」

怪訝そうに眉をしかめて、日番谷はボールをぽい、と夏梨に向かって軽く投げた。夏梨はそれを両手でキャッチして、スツと翡翠に目を向ける。

「ありがとな、冬獅郎」

「あ？ 何だよ、急に」

唐突にそんなことを言われては、日番谷も反応に困る。

事が終わってから何回も礼を言われたのに、まだ言うのか、と言いたげな瞳を夏梨に投げかけた。

すい、と夏梨の視線が下に下がる。

「あのさ、あたし…」

「何、今更改まってんだよ」

日番谷は腕を組んで、夏梨にそう言った。夏梨は口ごもっていて、お世辞にも普段通りとはいえない。

「…てめえらしくねえな」

困ったように後頭部に掌をやって、少しため息をついた。

「何だよ？」

キッと視線を集中させて、夏梨を見つめる。本人には何の気がなくても、夏梨にとっては大問題。その視線自体が、もう大変なのだ。

「あ、ああ、あんま見んなよっ！ 恥ずかし…いや、その…」

「はあ？ どうしたんだよ、お前？」

「異常」。その二文字が、日番谷の頭には浮かぶ。普段の夏梨ではない事は確かだし、むしろ百八十度正反対だ。気の強い夏梨が、口ごもるなんて事は、全くと言って良いほど、無いに等しいだろう。

「…分かった」

「へ？」

突然の日番谷の発言に、夏梨は素っ頓狂な声をつい出してしまふ。

「俺がお前の方見なきやいいんだろ。見ねえからちゃっちゃと用件を言え」

スツと後ろを向き、夏梨には「十」と書かれた隊首羽織が見えるだけだ。先ほどの翡翠の瞳はないし、耳元で呟かれたら思わず鳥肌がたってしまうようなアルトの声も、もうしない。夏梨は、サッカーボールをだむつ、と地面に叩きつける。片足でそれを押さえつけ、はぁ、と息を吐いた。

「か、仮だったけど…冬獅郎と、かか、か、彼氏になれて良かった…って、思ってる」

かなりつつかえていて、聞き取りづらい。だが、確かに日番谷はそれを聞き取った。

「…それで、終わりか？」

「…おう」

日番谷の問いに、全てをやりきったかのような声で、夏梨は言い切った。日番谷の口角が、少し上がる。

「で？　　どういう意味だよ、それ？」

不意に目の前から居なくなっただかと思うと、スツと気配も無く背後

に表れた日番谷が、意地悪そうに夏梨の耳元でそう呟く。思わず、夏梨は、ほう、息を吐いた。

「何だ、お前？ やけに変だと思ったら…そう言うことだったのか」
「わ…悪いかよっ！」

日番谷は夏梨の帽子の鏢を、後ろからぱん、と叩くと、「別に」と面白そうに呟く。夏梨は自分でもう一度帽子を深くすると、日番谷に向きあう。頬がどこことなく赤いのは、夕焼けのせいだとしておこる。夏梨と日番谷の間に、僅かにぴりりとした空気が流れた。

「おっと」

日番谷が空を見上げる。

「そろそろ時間だな」

言って、腕を組んだ。日番谷に習って空を見上げた夏梨の帽子の鏢が上がっているのを視界の端で確認すると、スッと夏梨の真正面まで瞬歩で迫る。

「とっ…」

瞬間、夏梨の唇に柔らかいものが触れた。

「じゃあな。また今度会おうぜ、夏梨」

街のオレンジが、より一層深まった。

夏梨は呆然と、もう姿の無い銀髪を想っていた。

f
i
n.
.
.

橙　一オレンジー（後書き）

甘くなってしまったでしょうか…（^^；

初めての日×夏だったんですけど、どうでしたかね…？

お気に召してもらえたら嬉しいです（^^＊

PS

私が書いた小説を、多くの方々が読んでいるんだ…。

そう考えただけで本当に嬉しいです（^^＊

と！　　いうわけで…今回は皆様にアンケートを実施しようと思いま
す♪

詳しくはこちら↓<http://ameblo.jp/runak>
k／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6824g/>

不器用な恋愛

2010年10月9日18時24分発行